

どうなる？

新しい社会科

新学習指導要領が求める

地図帳の使い方①

愛知教育大学人文社会科学系教授 寺本 潔



地図帳が使われない!?

先日、久しぶりに4年生を対象に飛び込み授業をやらせてもらった。単元「わたしたちの県」の学習に絡めて地図帳を使った。まず指旅行を指示した。「人差し指が自分の分身だと思ってごらん。」「まるで指先に見える土地を旅しているような気分になるよ。」「爪に自分の顔を書いてみると、もっと楽しく指旅行ができるよ。」と示唆すると本当に爪にマジックで顔を描き始める児童が続出。さらに、「県外の人にわたしたちの県のことを紹介するために、1泊2日の県内『見る・る(食べる)・ぶ(学ぶ)旅プラン』を班で考えてもらいます。」と指示すれば、巡るルートを探すために地図帳を食い入るように見つめ始めてくれた。班の仲間と「どこに泊まろうか？ 温泉のある町がいいんじゃない？」とまるで本物の旅行プランを考えるかのように楽しそうに話し合う。児童にとって、地図帳の拡大図「○○地方の地図」はカラフルな産物記号や土地の高低を示す段彩、交通路などがたくさん印字してある楽しい世界なのだ。

しかし、授業後の協議会でショッキングな

話を40歳代の女性教師から聞かされた。その話とは、「わたしは地図帳を授業で開かせていません。児童がいろいろ書いてある地図帳の細部に注目しすぎて社会科の授業でねらいとしたいところにかかないからです。」といった談話である。40人近い児童に一つの学習問題を追究させたいのに児童の注意が地図帳によって散漫になるのを教師が怖れている。筆者が、飛び込み授業でやって見せたように、県の様子をつかませるために「1泊2日の旅行プランを考えよう!」というような「軽めの問題」は設定しづらいのかもしれない。その背景には、社会科の単元目標が、働く人や公共の仕事の工夫・努力への気付きに偏っていて、社会認識の一環である県や国土、世界の地理認識形成をあまり重要視してこなかったことも横たわっているのかもしれない。しかし、これからの社会科は地図帳を使用しなくてもすむような教科であってはならない。



「地図帳の使い方」を教える時間を

本誌がお手元に届く頃には新学習指導要領が告示されている。今回の新学習指導要領では、多様な文脈(テキスト)を読み解く読解力やそれをもとにした表現力、知識

や技能を活用する力の伸長が求められている。とくに社会科では読解力を培う中心教材が地図であることを忘れてはならない。地図帳は場所を知るための地名だけが掲載されているわけではない。縮尺、記号、高低、土地利用など多様な読解を要する内容が盛り込まれていて、それらの基本的な読み取り上の知識（約束ごと）なくして地図帳は活用できない。つまり、**新学習指導要領が改訂の原理としている習得（地名の記憶や記号の理解）と活用（地図の判読や地図利用）の二大特色が地図帳には一冊に凝縮され**

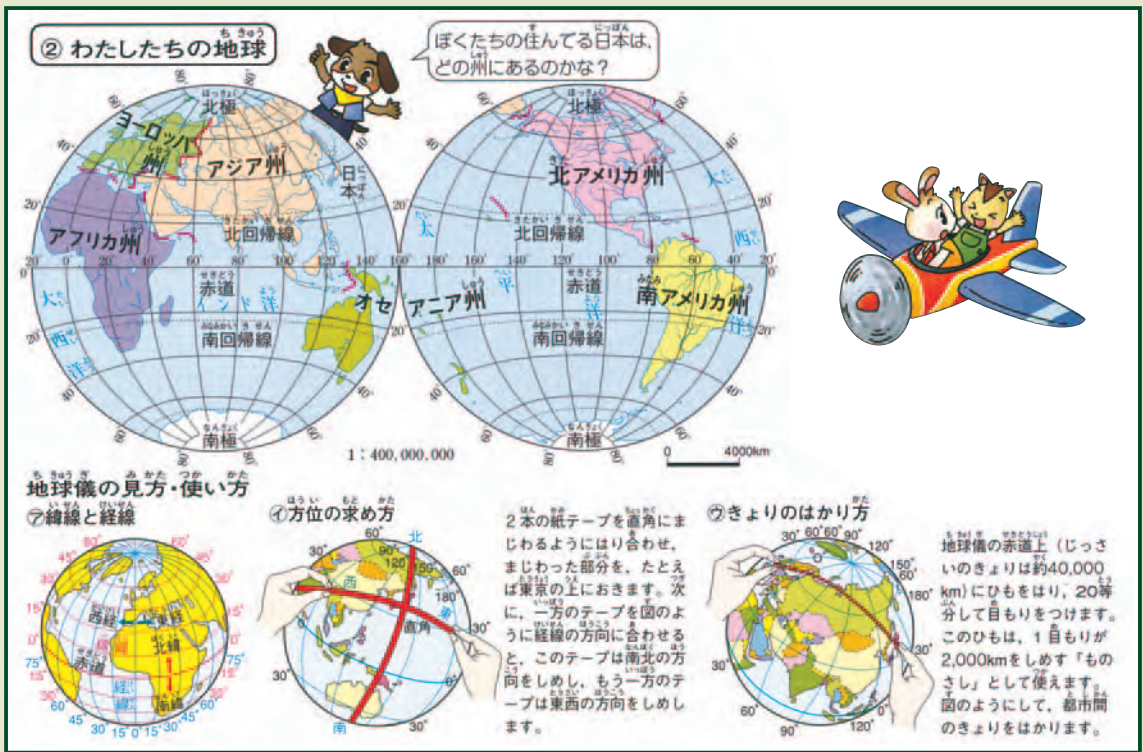
ている。まさに地図帳こそ、これから求められる学力にぴったりの教科書なのである。

先に紹介した地図帳を開かせない教師の事情をどうとらえるのか。社会科がひょっとすると道徳的なねらいに終始してはいないか、系統的に積み上げる知識や技能を軽視してはこなかったか、国土や世界に関する認識形成を軽んじてはこなかったかなど、今一度、再考する必要がある。そのためにも、単元にはないが地図帳の使い方（p.1～10）を教える時間を確保してほしい。できれば4年生の1学期中にである。時間的には最低で3時間確保すれば指導できる。そうすれば、その後学習させるゴミや水道、地域の開発物語、県などの学習にきつと応用転移してくれるはずである。高学年でもまだ地図帳の使い方指導を怠っている方は、是非急いで教えてほしい。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳（初訂版）』p.57-58

ほんの一部であるが習得と活用にかかわって、次のような知識や学習技能が地図帳を通して身に付く。以下に列記しよう。平面地図の見方がわかる、記号が示す意味を知る、四・八方位名称で自県の周りの県名を表現できる、索引の使い方を習得し経線・緯線が理解できる、統計数字が示す事実が想像できる、日本列島の四つの大きな島・地方・県・県庁所在地の各地名の包含関係が整理できる、産物記号が複数集まっている地域が見分けられ、そのわけを考えることができる、「かんたんものさし」で距離を測り、運輸の仕事の大変さがわかる、キャラクターの吹き出し文を読んで考えることができる、主題図をじっくり読み取れるなど、わずか76ページにすぎない教科用図書であるが、活用型の学力形成に寄与するのは間違いのない。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳（初訂版）』p.48



日本の都道府県名と世界の主な大陸と国名指導を

児童生徒の地名知識が急落している。文部科学省が小・中学校向けに実施した教育課程実施状況調査や日本地理学会が実施した外国地名知識調査の報道を見るまでもなく、主な国土の自然地名や都道府県名、世界の大陸名や各大陸にある代表的な国名指導を小学校段階から積み上げていく必要がある。グローバル社会にあって小学生でも年齢発達段階に応じてそれなりの国土や世界認識が形成される必要があるからだ。この主張は長年筆者も小学校社会科の問題点として指摘してきたが、今回の改訂で部分的ではあるにせよ、「主な大陸名や国名」が新学習指導要領で正式に位置づけられたのは嬉しいことである。わずかな外国地名だけを扱うので世界地理学習とは言えないものの、小さな一歩である。もちろん、名称だけ扱っても意味はない。位置と合

わせて習得させなければ、活用力につながらない。新学習指導要領は平成23年度版だから、今年はまだ教えずともいいと思っていたら残念である。この方面の知識が大きく欠如している事実が判明したのだから、移行期において補充指導すべきではないだろうか。世界の国名を扱う単元がないとおっしゃるかもしれない。国名だけ扱う単元は確かにない。しかし、5年の食料生産の単元で外国から多くの食料品を輸入している事実を世界全図で確かめたり、自動車の海外生産の場所調べ、情報で海外とつながる私たちの暮らしの学習で外国を登場させたり、6年の「日本の歴史」に登場する外国人の来航や日本人の海外渡航、国連の働き、地球環境問題など結構世界全図の登場場面はある。要は、地図を活用しようと思う教師の工夫次第なのだ。ただ、世界の大陸名は全くと言っていいほど小学校では扱って来なかった。これは新規の学習内容として指導の手順を新たに考えたい。大陸に

は、ユーラシア大陸を始め、アフリカ大陸、南北アメリカ大陸、オーストラリア大陸、そして南極大陸の六つがある。日本列島とは異なる大陸を扱うことで逆に弧状列島としての我が国の特異性に気付かせたい。さらに地球儀や世界全図で陸地と海洋の分布にも焦点を当てる必要がある。

授業の実際では、社会科らしく児童の切実感に絡めて教えられるか否かが問われる。筆者の素案で恐縮だが、次のような手順で指導してはどうだろうか。「地球の陸地の中で日本はどんな形なの？」→「日本列島は、大きな陸地である大陸とは異なる形をしているね。」→「大陸の間にはどんな大陸があるの？」→「世界には六つの大陸があるね。」→「日本のように大陸の端に島が連なっている国はあるの？」→「フィリピンやインドネシア、イギリスなどが仲間だね。」→「では、陸地を囲んでいる海はどうなっているのかな？」という具合に展開してはいかがであろうか。

国土の環境を教える

いよいよ地図帳が活躍できる場面が授業で増えるだろう。4年以上の各学年で地図や地球儀が重要視される。現代世界に生きる日本人の基礎を育てる小学校社会科の責任は重大



『楽しく学ぶ小学生の地図帳（初訂版）』 p.48

である。地図帳を通して小学校でも各学年なりの地理的視野を培う必要がある。とりわけ、5年生段階での時間数増を生かし、児童の視野を広げるよう指導を工夫する必要がある。大陸と海洋名、大陸にある主な国の名称と位置の理解を押さえた上で、国土の自然的な姿を世界の中で位置づけ、国土を愛する心情を培うことが求められている。地球温暖化の問題を持ち出すまでもなく、世界はつながっている。北半球に位置し、四季がはっきりとした弧状列島の日本。大陸からの季節風や太平洋高気圧の影響を受け、寒冷多雪、温暖多雨の気候の中で農業や漁業が発展し、文化が育まれてきた。日本をどう教えるかが新学習指導要領改訂で問われている。